

付けられており、第2群遺物を出土するS R-01・04・12 窯跡は最も新しい段階のIV群に位置付けられている。したがって、第1群遺物が第2群遺物に先行するものであることは明らかである。

これら以外の窯跡をみると、第1群遺物に近い特徴をもつ遺物を出土する窯跡はS R-10・17・18・19 窯跡、第2群遺物に近い特徴をもつ遺物を出土する窯跡はS R-02・03・05～09・11 窯跡である。したがって、第1群遺物は第I・II群の時期の窯跡から出土し、第2群遺物はIII・IV群の時期の窯跡から出土することがわかる。

ただし、第1群遺物と第2群遺物との相違点は、器形の微妙な違いや主体となる器種の占有率の違いという程度であり、両者の間に形式差を認めるには至らないものであると考えられる。

(3) 他窯跡との比較と年代について

ここでは他の窯跡群と比較することによって、一本杉窯跡群の特徴を明らかにし、年代について検討する。

① 他支群との比較

一本杉窯跡は白石古窯跡群の一支群である。白石古窯跡群は一本杉・東北・黒森・市ノ沢の4支群からなっており、これらの群は高田川によって開析された低地を取り囲むように径約 1 km の範囲内に存在している。

一本杉以外の他の支群は発掘調査は行なわれておらず、遺物も藤沼邦彦氏や中橋彰吾氏らにより表面採集されたものがあるにすぎないが、どの支群も瓷器系の中世陶器を焼成していること、器種組成は基本的には甕・壺・擂鉢の3種であることが知られている（藤沼：1976 他）。

遺物の胎土、焼成、縁帶のつくりなどは一本杉窯跡群と大きく変わらず、東北窯跡群では筋目のある擂鉢も認められている。また、市ノ沢窯跡群からは五輪塔の地輪の一部とみられる破片も出土している。

これらの支群の変遷については不明な点が多いが、東北窯跡群からは一本杉窯跡群ではみられなかった押印をもつ甕の体部片が採集されている。押印は、時期が新しくなると存在しなくなることが指摘されており、このことからすれば東北窯跡群は一本杉窯跡群より早くから操業していた可能性がある。

② 周辺の諸窯跡群との比較

ここでは、一本杉窯跡群と地理的に近い東北南部の中で、常滑系とされる諸窯跡群の出土遺物と比較してみる。

【八郎窯跡群との比較】

福島県梁川町八郎窯跡群は本遺跡の南方約 15 km と最も近い場所にある。焼成された器種は基本的

に甕・壺・擂鉢の3種類である（飯村・寺島；1987）。八郎窯跡群ではこの3種に限定されるのに対し、一本杉窯跡群ではこれら以外に五輪塔や仏花瓶などの仏具や火鉢、御皿などの少數の特殊品が存在する点で異なっている。

器種ごとに形態をみると、甕では口縁部が縁帶を有し受け口状を呈するという点では共通するが、八郎窯跡群のものは一本杉窯跡群と比べ縁帶の幅も狭く、端部の引き出しも短い。また、体部には一本杉窯跡群では全くみられなかった押印が施されている。

壺は広口壺と短頸壺があり、その特徴は両者に大きな差異は認められないが、量的には八郎窯跡群では短頸壺が「特異な壺」と報告されているようにわずかな例が認められているにすぎない。

擂鉢は製作に回転台を使用し片口を有するという点では共通するものの、八郎窯跡群ではかなりの割合で高台を有する（39/46）点や筋目の施されたものが全くみられないなど一本杉窯跡群と異なる様相もみられる。

八郎窯跡群の年代については、常滑窯との比較や熱残留磁気による年代測定から、「13世紀前半」とされている（飯村：1987・1992）。甕の口縁部の縁帶は新しい時期のものが広くなっているが、擂鉢の高台は基本的にあるものからないものへと変遷したとされていることから、八郎窯跡群は一本杉窯跡群より古いものと考えられる。

【宮城県北部の多高田窯跡・熊狩窯跡群との比較】

主な器種構成は、いずれも甕・壺・擂鉢の3種であるが、熊狩窯跡群ではこれに皿が加わる。また、一本杉窯跡群では少數の特殊品が存在することが他窯跡と異なる。

器種ごとにみると、窯では口縁部に縁帶を有し受け口状を呈するという点は共通するが、熊狩窯跡群では体部に押印の施されたものが出土する点で異なっている。

壺類は各窯跡間で大きな相違がみられる。口縁部が縁帶を有し受け口状を呈する大形の広口壺1（熊狩窯跡群の報告書では「甕B」）や小壺はいずれにも共通してみられるものの、熊狩窯跡群では壺A類、多高田窯跡では壺B類と分類されている比較的頸の長い壺が、一本杉窯跡群では1点しか出土せず、前二者とは異なっている。また、一本杉窯跡群の第2群遺物に特徴的な短頸壺（C類）は両窯跡からは出土していない。

擂鉢はいずれの窯跡でも法量的に大中小の3種みられることや、無高台である点は共通する要素であるが、多高田窯跡や熊狩窯跡群では筋目をもつものは出土していない。

このように、多高田窯跡・熊狩窯跡群では甕の体部に押印があることや、筋目のある擂鉢が存在しないという、一本杉窯跡群に比べて若干古い要素がみられ、このことからすればこれらの窯跡が一本杉窯跡群に先行することが考えられる。

③ 他地域の窯跡との比較

ここでは、遠隔地ではあるが、当時の窯業の先進地域である常滑・越前・加賀・越後の諸窯跡と比較してみる。

【常滑窯との比較】

愛知県常滑窯跡群は12~16世紀まで操業していたものと考えられ、大きく三段階14型式期の変遷が考えられている（赤羽・中野：1994）。

器種ごとにみてみると、甕は、口縁部が縁帯を有し受け口状を呈する点や縁帯が下方に垂れない点で5型式期と類似するが、頸部から口縁部のプロポーションは6a型式期と類似している。

鉢類は、常滑窯では5型式期の後半には、片口鉢II類の無高台化が始まり、6a型式期には高台をもつものは見られなくなる。一本杉窯跡群では高台はほとんど認められておらず、当該期の無高台化という流れのなかで捉えられるものと考えられる。しかし、一本杉窯跡群では擂鉢のなかに筋目をもつものが10~20%含まれるのに対し、常滑窯においては全時期を通して擂鉢に筋目は認められないという相違点がみられる。

壺類の中では、広口壺は、甕と同様、全体的器形や口縁部形態等の点で5~6a型式期と類似する特徴がみられる。一方、一本杉窯跡群では一定の割合でみられる短頸壺は、常滑窯では2型式期までの古い段階に存在するのみで、5~6a型式期にはない器種である。また、常滑窯では5~6a型式期に出現する玉縁口縁壺が、1点のみであるが一本杉窯跡群からも出土していることが注目される。

このような差異は、基本的には、本窯跡群を含めた陸奥南部の常滑系窯跡に共通してみられ、「地方色=地域性」と捉えられており、ある時期に常滑から導入された技術が、それ以後に技術導入がなかつたため、地域の中で常滑窯とは異なる展開を示したためと考えられている（飯村：1994）。

年代は、上述のように地方色があるため直接比較はできないが、甕の口縁部形態などから、常滑編年の5型式期よりも遡るものではなく、5~6a型式期に近い時期とみておきたい。

【北陸諸窯との比較】

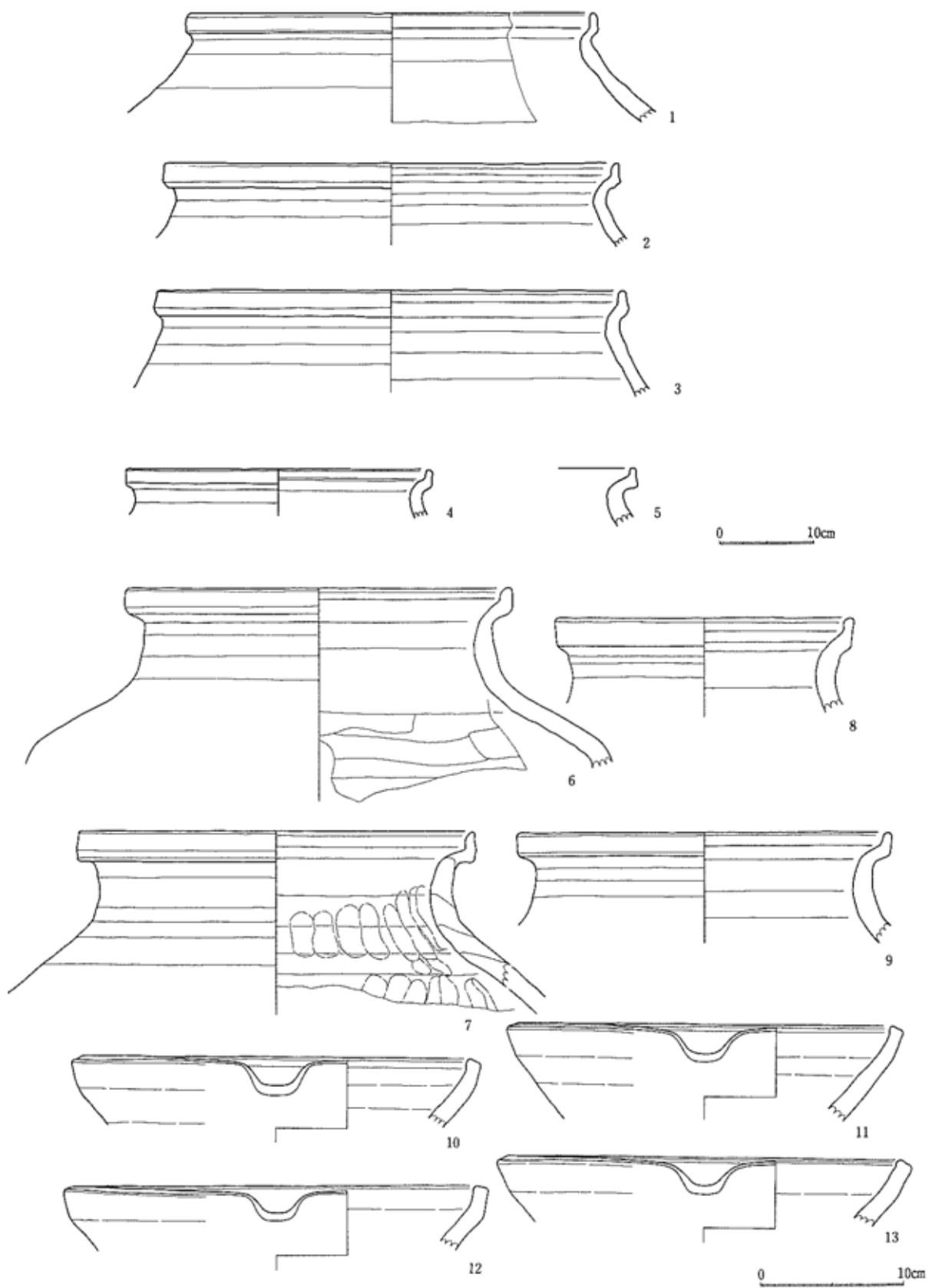
〔越前窯〕

福井県越前窯跡群は、これまで12支群約200基の窯跡が確認されており、12世紀末から16世紀末頃まで操業していたと考えられ、大きく5時期の変遷が知られている。越前窯の中で一本杉窯跡群のものと類似する窯跡に福井県水上窯跡群があり、II期の後半（13世紀後半）に位置付けられている（田中：1994）。

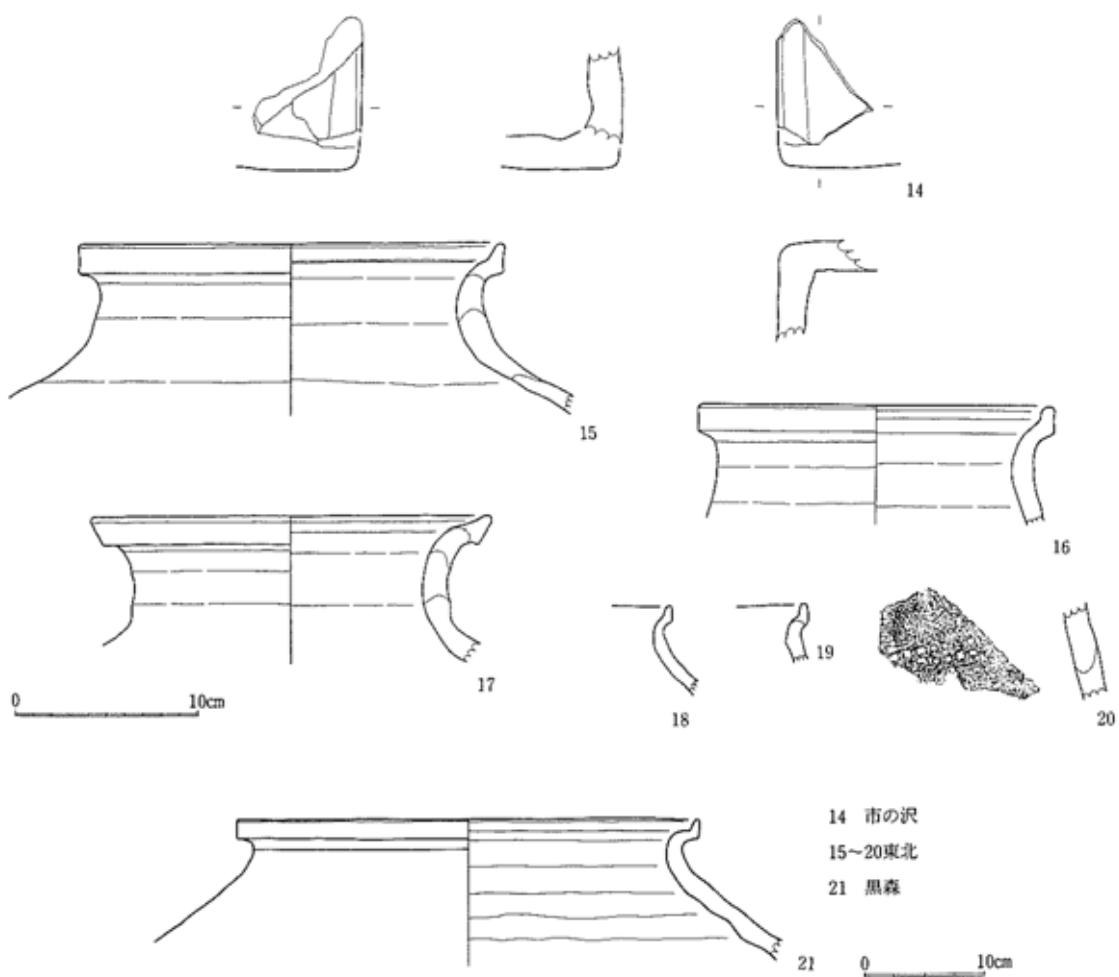
越前窯のII期の甕は幅の広い縁帯をもち、縁帯側面がほぼ垂直で口唇部の引き出しも長く、端部の作りがしっかりとしている。この時期以降、縁帯は幅を狭め口唇部の引き出しも短くなり、内側に痕跡的に樋口状の受け口をもつものへと変化していく。宮城県周辺の諸窯跡と同様に、縁帯が常滑のように発達することなく退化していくという、地域独自の変化がみられるることは注目される。

擂鉢類は器形が直線的に外傾するなど類似する点もあるが、水上窯跡群では多くのものが高台をもつこと、筋目をもつものはIV期の後半（14世紀後半）以降にしか見られないなど相違する点も多い。

また、越前窯ではこの時期にヘラ書きによる鳥や植物の装飾文の施された製品の増加が指摘されており、一本杉窯跡群でヘラ書きの施されたものが多く見られることと共通する。



第131図 市ノ沢窯跡出土遺物



第132図 市の沢窯・東北窯・黒森窯出土遺物

[加賀窯]

加賀窯は越前窯に近い石川県南西部の那谷町・西原町を中心に分布する瓷器系陶器を生産する窯跡群で、これまで12群35基の窯跡が確認されている。12世紀末から14世紀末頃まで操業していたものと考えられ、大きく6時期の変遷が考えられている（宮下：1992）。

一本杉窯跡群の遺物と比較すると、甕は短く外反した口縁部にあまり発達しない縁構を有する点で、擂鉢は無高台で、筋目を施条したものがかなりみられる点で、第Ⅲ期（13世紀中～後半代）のものと類似している。

また、Ⅱ期（13世紀前半代）の那谷町カナクソダニ窯跡からは肩から体部にかけて櫛歯による波状文の装飾の加えられた甕が出土している（宮下：1992）。同様の文様が施文された壺は一本杉窯跡群（SR-07窯跡）からも出土している。

[五頭山麓中世窯跡群]

五頭山麓中世窯跡群は新潟県北東部の五頭連峰西麓に分布し、須恵器系陶器と瓷器系陶器を生産した2系統の窯跡の存在が認められている。瓷器系の窯跡には笛神窯跡群・赤坂山窯跡群などがあり、北沢窯跡群などの須恵器系の窯跡に後続するものと考えられている（川上：1992）。

一本杉窯跡群に類似するものには赤坂山窯跡群出土（14世紀前葉）のものがある。共通する特徴としては、甕類は短く外反する口縁部が受け口状を呈する点や、擂鉢の大半が無高台で筋目が施条されていることなどがあげられる。しかし、赤坂山窯跡のものには、口縁部断面がN字形を呈し、縁帶下端が垂れるものが多く見られる点や、甕の体部に押印が見られる点で異なっている。

④ 年代

地理的に近い八郎窯跡との対比では、一本杉窯跡群は13世紀前半頃とされている八郎窯跡より新しく、これに後続する年代が考えられる。また、一本杉窯跡群と同様に白石古窯跡群の支群である東北窯跡群も、八郎窯跡に後続するものと考えられており、東北窯跡群には一本杉窯跡群より古い要素が見られることを考え合わせると、一本杉窯跡群の年代はおよそ13世紀後半頃と思われる。

なお、東北窯跡群が先行して操業していた可能性があることや、一本杉窯跡群では窯跡の数と焼成面数からある程度長期間操業していたと推定されることなどから、廃絶の時期は14世紀に下る可能性も考えられる。

また、常滑窯などの他地域の窯跡と比較してみると、いずれも13世紀後半頃～14世紀前半頃の時期のものと特徴が類似しており、上述の推定を裏付けている。

なお、後述する消費地での状況も、13世紀～14世紀の遺物と共に出土しており、年代的な矛盾は見あたらない。

（4）消費遺跡との関連

ここでは、城館や集落などの消費遺跡との関連について検討してみる。なお、白石古窯跡群の4つの支群（一本杉・東北・市ノ沢・黒森）で生産されている製品は大きな型式差がみられず、しかも焼成の状況や胎土も類似しており、消費遺跡から出土した遺物を支群ごとに区別することは不可能である。ここでは4つの支群を一括して「白石窯」の遺物として扱うこととする。

現在のところ白石窯産と考えられる遺物が報告されている遺跡は47ヶ所あり、宮城県中南部から福島県北部の広い範囲にわたって分布している（第133図、藤沼・千葉：1992に加筆）。大まかにみると阿武隈川流域と名取川・広瀬川流域そして七北田川流域に多い。流通に関して、これらの河川が大きな役割を占めたことが想定される。

阿武隈川流域の遺跡には、角田市田町裏遺跡（斎藤：1991他）や郡山遺跡（新庄屋：1980）、丸森町矢ノ目遺跡（後藤：1984）や県境を越えて桑折町金谷館跡（東北歴史資料館：1983）、福島市医天王寺跡（藤沼：1983）などがある。また、名取川・広瀬川流域の遺跡には、仙台市松木遺跡（工藤・佐藤：1986）や今泉城跡（佐藤：1983）、王ノ壇遺跡（小川：1993）などがある。これらの遺跡では消費されている陶器のなかでも白石窯産陶器の占める割合が他地域に比べてかなり高くなっている。

七北田川流域の遺跡には、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（白鳥・加藤：1974）や多賀城市新田遺跡（石川・千葉：1990）・山王遺跡などがあり、これらが現在知られている中では分布類の北限となっている。